

# 指導のスキルとデータを 積み上げ**継承**するために 実効的な資料を作成し情報を共有

## ▶ 小山高校(栃木・県立)

構成／平林夏生 文／永井ミカ

「前任校でも進路指導を担当しました。しかし、そこで培ってきた効果的な取り組み等を他の先生方につかり引き継ぎできていないままの異動となったことを後悔しています」と田中先生。また、小山高校でも以前ある年だけ国公立大学合格者が例年よりかなり多かったことがあった。一人の担任の先生の職人のようなノウハウがあったからだが、それもうまく引き継がれることはなかった。

そういったことを再び繰り返さないための方法の一つとして、進路指導部では毎年3月、その年の反省をふまえた翌年度の「進路指導部全体計画(ツール1)」を立てている。この計画書を確実に

### 進路指導部全体計画を指針に 教員全体での協働体制を確立

## 進路指導の課題とテーマ

栃木県立小山高校は、2018年、創立100周年を迎える伝統校。農業・商業高校としての歴史が長かったが、72年に男子普通科を設置。06年には男女共学とした。徐々に進学実績を伸ばしながら中堅進学校として地域の信頼を得てきた。

進路指導部長の田中正樹先生が同校に赴任したのは8年前。進路指導副部長を1年務め、前任校時代にも抱えていた「担当者が変わると、いい取り組みでも継承されない、またはただ続けていても形骸化してしまう」「取り組みによっては現場の教員の負担感が重く疲弊する」という悩みが小山高校にもあると感じた。また、当時の小山高校の進路指導はどちらかといえば学年主導型。「それでは学年による指導に差がでる。また個々の取り組みの意義と目的を明確にする必要がある」と考えた。赴任2年目で進路指導部長となってから、毎年PDCAサイクルを回し進路指導全体の舵取りを進路指導部が行う体制を構築。近年は副部長も2人体制とした。現在、取り組み一つひとつの理念やスキルを実践しながら継承、また先生方の経験や卒業生の成績を数値などのデータに置き換え、整理・蓄積している。さらに学習指導部や数理科学科とも連携を強化。学校全体で共通認識を持ち「チーム小山」としての結束を強め、「入学してから生徒本来の良さ・力・可能性を伸ばす」指導に尽力し、県南地区の進学拠点校作りを進めている。

作り上げ、部員はもちろん全教員と共有する。「二人のスーパーマンではなく、組織全体で継承し強くなる必要がある」とその理由を語る田中先生。進路指導副部長を2人としていることも、関わる人数を多くすることが大切だと考えているからだという。

18年度の計画書はA4全7ページ。進路指導部の目標「志望する進路に向けて、遅く努力できる生徒の育成を目指す」、個々の生徒の進路希望が達成できるように指導する「から始まり、どのような指導をしていくかが詳しく書かれている。努力数値目標も「国公立大学合格者数 現役70人以上を目指す」など具体的なだ。

2つのキーワード「3年間の指導ストーリー」を確立する! 「仲間の声を力にす



学習指導部長  
落合一憲先生(後ろ左)  
進路指導部長  
田中正樹先生(中央)  
数理科学科長  
岡本英雄先生(後ろ右)  
進路指導副部長  
加藤正雄先生(前左)  
進路指導副部長  
松本修一先生(前右)

### ◎進路状況(2018年3月実績)

大学進学205人、短大進学2人、  
専攻進学7人、就職1人、その他19人

国公立大学の現役合格者数は例年70人前後。探究活動のある数理科学科を中心に大学進学者の約1/3が推薦・AOでの合格。近年、GMARCHをはじめとする私立大学への合格者数も増えている。

### ◎School Data

1918年創立／普通科(普通科・数理科学科)／  
生徒数699人(男子433人・女子266人)

ツール1 進路指導部全体計画(2018年度/全7ページより一部抜粋)

ダウンロード可

**平成30年度小山高等学校進路指導部全体計画**

**1. 目標**  
志望する進路に向けて、邁進し努力できる生徒の育成を目指し、個々の生徒の進路希望が達成できるように指導する。

**2. 進路指導部の努力点**  
(1) 将来の目標『なりたい自分』を明確に設定させる指導を実行する。  
(2) (1)の目標達成のために、当面の目標を明確に設定させる。  
(3) (2)の目標達成のために、主体的に根気強く努力できる生徒の育成のための指導を実行する。  
(4) 個々の生徒の能力・適性・個性に合った進路指導を推進する。  
○適性に応じて進路を主体的に決定させる指導を適切に実行する。  
○職業観・勤労観を向上させる効果的な指導を実行する。  
○職業研究や大学研究等の進路学習を充実させ、将来を見据えた自己実現が図れるよう、3年間を通じた体系的な進路指導を実行する。  
(5) 学習指導部と連携した下記の取組を推進する。  
①底学年(1, 2年次)における基本的学習習慣の定着強化を図る。  
②『学習指導・進路指導の基本指針』の一層の改善を図るとともに、全職員に周知徹底・共通理解を図り、確実に実行する。  
(6) キャリア教育について、総合的な学習の時間等を活用して、アクティブラーニング型授業展開する等、効果的に企画・実行する。  
(7) 課外等、実施方法・内容等の充実を図る。  
※ICT活用:スタディサプリ(Recruit) 検討:Classi(Benesse)  
(8) 進路指導に役立つ資料・情報等の収集・作成及び生徒の希望進路実現するために必要な学校環境の整備・充実を図る。  
(9) 「受験は団体戦!」仲間の声を力にし、『One for all, All for one』の雰囲気を生徒及び教員に醸成し、チーム小山への意欲を高める。  
(10) 高大接続改革に向けた教員の意欲の向上と理解を図る。

**3. 進路指導部の指針**  
「生徒のモチベーションを上げる」仕掛ける・攻めの進路指導  
◎「行き先」指導ではなく、「生き方」指導

「信じる」Trust! (生徒の可能性を信じる)  
「育てる」Foster! (生徒の夢と幸せになれる人間力を育てる)  
「変える」Support! (生徒本来の良さ・学力・心を変えよう)

**5. 効果的な進路指導のための 2つのキーワード**  
(1) 3年間の指導ストーリーを確立する! ~キーワードその1~  
「系統性、段階的に『タイミング』を重視し、その能力の指導を行い『旬』の時期を逃さず『仕掛ける』指導が実現に効果的だ」  
→教員、時には先生、時にはカウンセラー、時には教員、時には生徒、時には父親・母親・兄弟

＜1年次進路指導＞文理選択・職業理解  
＜2年次進路指導のトピックス＞大学内情・学部・学科理解、受験について理解を深める  
＜3年次進路指導のトピックス＞  
①離れ後の切り替え  
②夏休み前 指導:学習計画(得意も得意直し)「夏を制する者は入試を征服する」の「制する」の具体的な方法を提示。  
③夏休み中 指導:大半の生徒が夏明けには多かれ少なかれ不安・焦りを感じる。モチベーションを下げないよう、かつ焦りを和らげられるよう指導。  
※卒業生の懇話会・学年集会・進路相談指導・卒業生による合格体験談等  
④学校祭後の切り替え:パーンアウトシンドロームにならないよう、精神論を振り回すだけでなく、具体的な材料を示して気持ちを切り替えさせる。  
~指導の転換期「離れど監督」から「サポーター」へ~  
⑤秋~冬:おそろめさせない指導、気持ちを鼓舞する仕掛け、団体戦!  
⑥冬~春:自宅学習期間も自宅学習。  
小論文・英作文等の個別指導も補修で最後まで粘らせる。  
(仕掛ける) 生徒の心算状態やモチベーションの崩れに合わせて、「この時期にはこの話を!」「このタイミングでこのメッセージ!」「どういう指導・相談(進路)を進めたい言葉の力!」「体系的な進路指導・進路実現のエネルギーの源にしよう!」

(2) 仲間の声を力にする! ~キーワードその2~  
○旬(タイミング)を逃さない、声かけ!  
「受験は団体戦!」仲間の声を力にし、One for all, All for oneのみんなが頑張る雰囲気・仲間への「気づき」が生徒を成長させる雰囲気チーム小山への帰属意識を醸成。→「チーム小山」の意識

**6. 主な具体施策**  
(1) 学習指導と進路指導の基本指針を、全職員に周知徹底させるとともに、その確実な実行を図る。  
(2) 進路意識の高揚と進路学習の充実  
○進路意識:学習意欲・受験に頑張る気持ちの喚起・高揚、受験の傾向と対策、模範、入試情報の提供  
学内への広がり:総合的な学習の時間等を通して、3年間計画に進路学習を実施する。  
実施後は、各行事・ガイダンスを効果的にするため、事前指導・事後指導の充実を図る。  
【進路・受験指導】  
(3年生) 1学期:4月24日(水) ② 2学期:9月4日(水) ② 2月20日(水) ⑦  
(2年生) 1学期:5月8日(水) ⑦ 2学期:10月16日(水) ⑦  
(1年生) 1学期:6月30日(水) ⑦ 2学期:10月2日(水) ⑦ 2月20日(水) ⑦  
【一日大学体験】(1年生) 10月15日(月) 筑城大・東京理科大学・筑波大学  
【学部・学科説明会】(2年生) 7月5日(水) 学習部大・山形大・群馬大・筑城大・長野大等。

全教員で内容を共有できるようにしたもので毎年更新。進路指導部の取り組みを担当者が変わっても引き継ぐ。内容は、

1. 目標
2. 進路指導部の努力点
3. 進路指導部の指針
4. 努力数値目標
5. 効果的な進路指導のための2つのキーワード
6. 主な具体施策
  - (1) 学習指導と進路指導の基本指針の共通理解
  - (2) 進路意識の高揚と進路学習の充実
  - (3) 進路指導部長面談
  - (4) 志望校検討会と出願検討会
  - (5) 模試の活用の充実
  - (6) 模試分析会・志望校・出願・国立公立出願検討会など、23項目

※全ページダウンロード可

同校では教員がオリジナルで問題を作った校内模試を3年生で3回実施している。しかし、過去、模試の結果についてあま

**校内模試の蓄積データを分析。個別指導に徹底活用**

「信じる」Trust! (生徒の可能性を信じる)  
「育てる」Foster! (生徒の夢と幸せになれる人間力を育てる)  
「変える」Support! (生徒本来の良さ・学力・心を変えよう)

「取組む」Trust! (生徒の可能性を信じる)  
「育てる」Foster! (生徒の夢と幸せになれる人間力を育てる)  
「変える」Support! (生徒本来の良さ・学力・心を変えよう)

「信じる」Trust! (生徒の可能性を信じる)  
「育てる」Foster! (生徒の夢と幸せになれる人間力を育てる)  
「変える」Support! (生徒本来の良さ・学力・心を変えよう)

4月の職員会議で全体計画の内容を説明。また、進路スケジュールの節目にも学年会議などで意義を伝え、取り組み実施後には振り返りの報告を行う。「教員の意識は高まっていると思います。今後チーム小山として、連携・協力体制をより強化していきたい」と進路指導副部長の加藤正雄先生は言う。

連携強化の一環として、今年度からは学習指導部との取り組みを始めた。主に低学年の学習習慣の定着を図る。「学習と進路は車の両輪。お互いに高め合う関係を構築していくことが、進路実現には欠かせないと信じています」と学習指導部長の落合一憲先生。この取り組みについても、計画書では触れており、学習指導と進路のスケジュールが連動していることがわかりやすくなっている。

入試形態を結びつけたものだ。「これが、

**ツール2 校内模試分析(『進路の手引』より抜粋)**

り分析がなされていない時期があった。「外部模試だけに絞る学校も増えていっているなか、問題を作るといことは教員にとってはかなりの負担。それが活用されなければ士気も下がってしまいます」(田中先生)。

そこで進路指導部が作成したのがツール2の校内模試分析。過去8年分の校内模試の成績を元に、模試の点数と同校の卒業生が実際に合格した大学・学部・学科・入試形態を結びつけたものだ。「これが、

校内模試平均得点	大学	学部	学科	型	入試区分
614	筑波大	理工	化学類	前	一般入試
611	金沢大	理工学域	環境学デザイン	前	一般入試
584	筑波大	理工	社会工学類	前	一般入試
579	宇都宮大	工	情報工	前	一般入試
552	上越教育大	学校教育	初等教育	後	一般入試
540~549	東北大	農		前	一般入試
	筑波大	理工	社会工学類	後	一般入試
530~539	筑波大	保健医療	放射線技術科	前	一般入試
	東京農工大	工	生命工	前	一般入試
	山形大	工	バイオ化学工	前	一般入試
520~529	筑波大	保健医療	看護	後	一般入試
	東北大	農		後	公募推薦
510~519	富山大	理	物理	前	一般入試
	筑波大	理工	化学類	前	一般入試
490~499	東京農工大	農	生物生産	前	一般入試
	首都大	都市環境	都市/都市基	前	一般入試
	宇都宮大	農	農業環境工	前	一般入試
490~499	宇都宮大	工	機械シス工	前	一般入試
	新潟大	理	地質科学	前	一般入試
	群馬大	理工	環境前生理工	後	一般入試

3年生の校内模試(5教科900点満点)の結果を分析。メッシュ(点数区分)が細かいことから、どこであと何点伸ばせば進路にどんな変化が期待できるか俯瞰できる。それにより、面談や復習による成長へつなげることができることがポイント。やりっぱなしではないことで、先生方の入試問題分析や問題作成のモチベーションも上がり、協働意識が働く。

先生方の意欲に火をつけることになったと思います」と田中先生。分析結果を共有、校内模試の意義を納得してもらったことで問題作成の精度は上がり、毎年の平均点がほぼ変わらず、校外模試とも連動する結果となっていた。地元国公立大学や高大連携で身近に感じている大学など、生徒たちが実際に受験したいと考えている大学に照準が合っているので、面談の資料としても使いやすい。

生徒には「進路の手引」で公開。「あとX点アップすれば、〇〇先輩の行った〇〇大学〇〇学部合格できる可能性が出てくる」という具体的な目安が見えやすくなった。進路指導部では進路指導部長と全3年生との2者面談の機会を年2回ずつ設けており、生徒は志望動機を確認すると共に、そこでしっかりデータを読み取りながら進路検討ができる。これらの取り組みが美り、同校の国公立大学の合格率は全国平均をかなり上回っており、地元宇都宮大学を中心にさらに伸び続けている。

なお、同校ではオリジナル設問の1・2年生向け実力テストもなるべく多く実施している。「本校の生徒は復習を繰り返すことで力がつく学力層(田中先生)」ということで、追試や2回、3回と繰り返す振り返り授業で学力アップを図っている。

### 外部と連携・協働した AI型キャリア教育の充実へ

同校では96年度から普通科の中に数理科学科クラスを設けている。数理科学科・理数科としては栃木県で唯一だ。

「当時から今でいうスーパーサイエンスハイスクールに近い取り組みをしていたと聞いています」と数理科学科長の岡本英雄先生。「課題研究・探究活動のため、博物館や大学など協力していただけそうところには積極的にお願いしてきました。外部連携は確実に生徒に力がつきます」。

早い時期から小山高校には外部連携という文化があったこともあり、現在の進路指導部でも、教員の負担削減、生徒に力をつける、進路に対する視野を広げるなど、さまざまな目的で外部との連携を行っている。

ただし丸投げをするのではなく、協働で小山高校らしいものを作り上げていくというイメージだ。そうして生まれたのが、1・2年生で実施するアクティブラーニング型キャリア教育。生徒と大学生がグループを組み、進路や学問について共に学んでいく。狙いは「進路に向けた動機づけ」「学問



アクティブラーニング型キャリア教育「未来の教室」。大学生から進路決定体験談や大学生活の話聴いたあとで、高校生が進路語り行動宣言を行う。

の社会的意義の実感」「進路実現に向けた主体的な選択」だ。大学生の話聴き、語り合い、同級生と宣言を行う…外部から提案があった授業をベースに話し合い、アレンジしながら作り上げたプログラムだ。

「以前からパネルディスカッションや講演を行っていましたが、生徒の心に刺さるもの、なかなか届かないものがありました。どうすれば「行き方」ではなく、生き方、指導にかなげられるか、どうすれば生徒を引きつけて内発的動機づけができるかを考えた一つの結果がアクティブラーニング型キャリア教育です」と田中先生。そのほか、文理選択講演や適性検査の分析などは「データや経験が豊富な外部関係機関に依頼。「先生方の業務の負担軽減になるだけではなく、誰かが異動しても外部関係機関の担当者との連絡をとれば同じ取り組みができる。これも、効果的な取り組みを継承していくための二つの方法だと思えます」(田中先生)



1クラス40名の数理科学科では1年生のフィールド合宿で科学的・論理的な思考力を養い、2年生の課題研究につなげている。推薦・AO入試により、筑波大学などの難関大学への合格者も輩出。写真上/協力大学の研究室で課題研究の打ち合わせ 写真下/宇都宮大学での成果報告会



### 今後の展望

**積み重ねを継承し、学校全体で取り組むことで、生徒の良さを最大限引き上げる進路指導に**

進路指導部の数々の取り組みが定着してきた同校。これからの入試改革に向けて新たに拡大したいのが、数理科学科で長年取り組んできたような実践。「今後普通科でも総合探究活動を進路実現に結びつけていく必要があります。長年に渡る数理科学科のノウハウを生かし、大学の公開講座をはじめいろいろな機会を利用して生徒を積極的に外の世界に触れさせたい」と進路指導副部長の松本修二先生は言う。

また、進路指導部の方針として、例えば動画授業などICTを学習に活用する生徒としない生徒では成績に違いが表れるか…などといった細かなデータも収集・蓄積し、生徒や教員にエビデンスを示していくという。何事もやりっぱなしにせず、PDCA(計画↓実行↓評価↓改善)を繰り返すことが継承につながることをわかってきたからだ。

もちろん、これまで行ってきたさまざまな取り組みの中ではうまくいっていないと感じられるものもあった。しかし、教員同士の強い連携があれば風通しよく意見交換もでき、失敗の繰り返しを防ぐことにつながる。近年、「入学してから伸びる学校」に育ってきたという同校。「小さな積み重ねを大切にし、生徒本来の良さ・可能性を引き上げ伸ばしていきたいと考えています」(田中先生)